

く
白と黒の継ぎ手
く

八
重
代
か
り
す

第一部 根の国から来た少女

フウルウの前では一人の小娘——フアグイ——デイーナザードが口をぽかんと開けていた。

濃い紅茶色の髪、淡い小麦色の肌。北方系の顔立ちに、その中でも珍しい金色の眼。その奇しき双眸が今はパチパチしている。女にしては高い背丈。乏しい女の膨らみ。長くしなやかな四肢。すらりと引き締まった瘦躯。露出こそ皆無だが、動きやすく肌に密着させているため、身体の線が露になる粗衣。とてつもなく長くなつた三つ編みは、そのきつい結び故、額が目立つものの、それが凛々しいと村の娘達からは評判である。

フウルウの後ろには一人の少女——ザビエヤ——鶴が昨日と同じ黒衣で一人立っていた。

水面に映える月の様な白皙の玉肌。光を飲み込む岩戸の様な黒洞の双眸。儂さを匂わせる細い手足。その全て包み込むは漆黒の法衣。黒の中にぬらりと輝く初々しさを秘めたうなじ。首の後ろには庚申薔薇のつぼみを思わせる紅一色の飾り布。その飾り布で束ねられた流水のように癖がない闇色の髪。そして、その黒髪は腰に届くほどに長く、あたかも常夜に囚われた姫君を思わせる。

「……」

「……」

「……」

鶴は蹠の厳しさを証明するように、背筋を真っ直ぐに伸ばしていた。十を超えたばかりという幼さと、その可憐さに反し、その举措は大人びており、屹然とさえしている。だが、それでいながら同時に傲慢さを感じさせない、柔和な物腰も兼ね備え、きよとんとした視線をデイーナザードに向けている。

「かつ、可愛いっ！」

「えっ……」驚きの声をあげる鶴。

いきなりデイーナザードは鶴に駆け寄り、抱きついた。

「可愛い！ 可愛い！ 可愛い！ あくん、もう、可愛い過ぎ！」

「あ、あの」

鶴は驚いた様子で頬を赤らめてはいるものの、あまりの唐突さになされるがままになつていた。一方のデイーナザードは盛大に頬擦りしながら、

「ね、先生」とフウルウに呼びかけ尋ねた。「この娘どこから、盗んできたの？」

「阿呆か！」

「じゃ、買ったの？」

「そんな金はない！」

「じゃ、あつたら、買うんだ？」

「……」

——不覚だ。よりもよってこの小娘に見つかるとは……。

昨晚から不幸続きの哀れな男——すなわちこのピヤオ・フウルウは自らの軽率な行動を呪った。

だが、フウルウには他に行き場がない。歴史学者志望などという胡散臭い立場である今のフウルウには当然持ち家などない。

そして、このミナレットの村では、ここシャービス亭が村唯一の隊商宿であり、その一般にも開放されている食堂が、専用の校舎のないこの村の学校代わりであり、村でたった一人の教師であるフウルウの現住所でもある。つまり、フウルウにとって、今ディーナザードにもみくちやにされている少女を連れて帰れる場所は、借家であるこのシャービス亭だけなのだ。

ところが二人は契約の後の調整に手間取ってしまった。シャービス亭に到着したのも、結局、夜が明けてからだ。そこで、フウルウはこの小娘には見つからないように、鶴を連れてこっそりと部屋へ戻ろうとしたものの、朝食の仕込みをしていたディーナザードに出くわしてしまったというわけである。

しかも、フウルウの前で大はしゃぎしているディーナザードという小娘——実はこのシャービス亭、唯一の亭員にして、亭主でもある。だから、説明を求められれば、フウルウは返答せざるをえない。この店の主であるディーナザードの機嫌を損ねれば、フウルウが明日から草を枕にせねばならない。

「だから、説明しよう！」焦ってきたフウルウは少し頭を冷やそうと、茶に手をつける。そして、予め用意しておいたでつち上げ話を繰り返した。「知人の娘を預かる事になったのだ！」

「じゃ、その知人の氏名は？ 年齢は？ 仕事は？ 住所は？ あなたとの関係は？」
「……いや、だから、それは……」

矢継ぎ早に尋ねてくるディーナザードにフウルウは返答に詰まる。

「ほら、誰が先生みたいな甲斐性なしに、こんな可愛い娘を預けるっていうのよ」

口をパクパクさせているフウルウを無視し、ディーナザードは少女の方を向く。そして、改めて真摯に見つめた。

「あたしはディーナザード・ビントⅡヌーフ・アルⅡシャービス、芳紀まさに十八歳の乙女です」

「え？あ……」と、少女はディーナザードの豹変に一瞬戸惑ったものの、すぐに少し古めかしいが、綺麗な標準語で答える。「わたしは鶴ぬえと申します。年齢は十二です」

「そう、ヌエ……いい名前ね」

そのうっとりとしたディーナザードの発音をフウルウは鼻で嘲った。

東方は《夏の国》の出であるフウルウにとって、生粋のアツザフル人であるディーナザードの——母音が三つしかないアツザフル語特有の——発音は奇天烈である。今回の『ヌエ』のように外国人の名前を呼ぶときは特にそうだ。勿論、フウルウ自身もかつては子音だらけのアツザフル語に苦闘していた。五十歩百歩である。しかしそれでも、皮肉の一つくらいは言ってやりたい心情だった。だから、

「……『鶴』の意味をわかっていいのか？ 素直には賞賛し難い単語だぞ」

と、フウルウは横槍を入れた。しかし、愛想のいい微笑みを纏ったディーナザードに、「あら、朝帰りの虚言家が他人の姓名判断など滑稽ですわね」

と、返されると、ピヤオ・フウルウは言葉がない。やむを得ずとはいえ、ディーナザードを騙そうとしたのは事実だ。朝帰りに関しては後ろめたい事などまったく——まあ、その、あまり——ないフウルウだが、状況証拠は全て自分に背を向けている。

大体、教師というのは不思議と道徳性が問われる職だ。例え無実であっても、疑いを招

く行いは避けるべきである。ディーナザードは言外にそう語っている。

「しかも、こんないたいたいけな女の子を誑かして」にやにやしなからディーナザードはさらに舌鋒を叩き込む。「店子を管理すべき、大家としてはどのような対応をとるべきかしら？」
フウルウの額が汗ばんできた。繰り返すが、ディーナザードに追い出されたら、フウルウには行く当てが全くない。

ついでに『店子』という言葉も、皮肉であり、脅迫だろう。確かにフウルウはシャーピス亭に幾許かの家賃を納めている。だが、一般的な相場を考慮すると、破格の安さだ。お世辞にも一人前の店子とは言い難い。この高待遇の裏には、このミナレットの村で高等教育を受けた人間——すなわち教師をやるだけの教養人はフウルウのみであり、そのためこの村でフウルウは希少な人材として、重視されているという背景がある。だが、それは村全体で見た場合の話で、ディーナザード個人となれば話は別だ。フウルウとの貸借関係は明らかにディーナザードの貸出超過で、フウルウの立場は極めて弱い。

また、希少な人材といっても、唯一無二の存在ではない。フウルウがこの村を出ていけば、村は遠方から別の人間を雇うだけだ。おそらく、フウルウよりも幾分か値がかかるが、『より質の高い教育のためには安いものだ』とか言って、嬉々として払う者もいるだろう。いや、むしろ、多い気がする。この村には——特にディーナザードより上の世代には——まともな教育を受けられなかった故に、苦汁を嘗めてきた者も多い。それ故に、教育というものの恐ろしさをよく知っているのだ。

もし、ディーナザードにここを追い出されたら——考えただけでもぞつとする。

皮肉は聞き流せば良い。だが、同時にこれは脅迫でもあるのだ。もしも、鶴のことを正直に話さなければ、ここから出ていってもらうわよ——と。

だが、事実を語るのには抵抗がある。理性の面でも、感情の面でも、鶴との関係は隠匿したい。

とはいえ、やはり嘘は、自分の首を絞める結果になりかねない。そもそも、この手の事には異様に鋭いこの小娘を言い包める自信もない。

……等々と、内心、進退窮まっているフウルウが、時間稼ぎに気取った仕草で、今日はやけに苦い茶をすすっていると……、

「あの、アル―シャーピスさん」ずっとディーナザードの腕の中で、なされるがままになっていた鶴は、突然はにかんだ口調で訴えた。「フウルウさんは何も人に恥じる事はしていません」

か細いとはいえ、鶴の援護射撃にフウルウは大きな期待を寄せた。ディーナザードも好奇と慈愛の入り交じった目で黒衣の少女を見つめる。

「ただ……わたしと、昨日の夜……その、……してしまっただから……」
何故か頬を染めた鶴の言葉。フウルウが茶を吹き出したのは言うまでもない。

「ぬ、鶴ちゃん……？」ディーナザードも今までの茶目つ気を吹き飛ばした。「あ、あなた、一体、何を？」

「ごめんなさい！ 昨晚の事はとても人様には言えません！」

既にフウルウは異常な事態と気管に侵入した液体のせいで、まともに声が出ない。故に全身の動作で誤解の解消を試みる。だが、フウルウを見つめるディーナザードの瞳は明らかに昨日とは異なる様相を示していた。

「でも、これだけはわかって下さい」鵜はおそらく無理であろう事を主張する。「フウルウさんがわたしを連れ歩いているのは、もう……もう、わたしが、わたし達が離れる事のできない関係になってしまったからなのです！」

唾然とするディーナザード。その脳裏で想像の翼が社会道徳に反する方向に大きく、そして力強く飛ばたいていることは、その表情から容易に窺い知れた。

しかも、鵜は途絶えることなく、言葉を紡ぎ続ける。

「……もう……もう、フウルウさんはわたしに側についていないと駄目なんです。フウルウさんは常にわたしを欲しがります。わたしなしでは永久に満たされないんです」

最早、この場での事態の收拾は不可能とフウルウは判断し……、

「フウルウさんはわたしなしでは生きられない肉体になったんです！」

……とりあえず、鵜を強引に奪い取って、シャービス亭から、逃げ出した。

「……なんであんな事を言ったんだ、鵜？」

フウルウは鵜の首根っこを掴み、全速でその場を立ち去った。そして、人通りの少ない場所に入るとすぐに少女を問いつめる。

「当面のことは私に任せる筈だろう」

「事前の話し合いをつい忘れてしまったのは謝罪します」鵜は深々と頭を垂れた。しかしすぐにはっきりとした口調で、「ですが、嘘はいけませんよ。フウルウさん」

「あらぬ誤解を招くよりはましだろう」

「でも、嘘による利益は信義を代償とし、信義を失うに値する利益などこの世にない。少なくとも、私の場合は……って、お師匠様が言っていました」

「私の社会的信義も考えろっ！」

フウルウは思わず大声を張り上げ、鵜はビクリと体を震わせる。フウルウは少し言い過ぎたかと後悔した。しかし、ここは厳しい一言も必要だ。そう考え、フウルウはあえて付け加えた。

「大体、何かと言うとお師匠様、お師匠様だ。そのお師匠様の為にも、君はもっと主体性を持つべきではないのかね？」

ここまではよかった。鵜も反省の色を見せていた。しかし、次の一言が少女の逆鱗に触れた。

「大体、君は君の師母たる女媧娘々が死ねといったら、死ぬのか？」

「当たり前ですっ！」

鵜の態度が一転した。

「わたしの心も体も全てお師匠様のものです！ わたしはお師匠様の為に生き！ お師匠様の為に死ぬのです！」

その瞳は見誤り様のない瞋恚の焰に彩られた。あまりの激情ゆえか、周囲の精霊までがピリピリと震え始める。

ここまで、感情的になった相手は軽く受け流すのが普段のフウルウだったが……、
「……それで？」

今回はその喉から漏れる冷たい声で焰を薙ぎ払った。

「君の傀儡たる私も、君や君の師母たる女媧娘々の為に死なねばならないのかね？」

鶴姫命ぬえひめのみこと

「……………っ！」

聡明な少女は反論できない。

ただ、溢れ出す感情の奔流がその瞳が潤ませた。

「……………悪い。言い過ぎた」

フウルウは目線を少女のそれから逸らす。

「いえ、わたしが悪かったんです」鶴は顔を手で隠すようにして、必死に涙をごまかそうとしていた。「何も知らないくせに出過ぎたまねを言っつて」

その謙虚さはフウルウの自己嫌悪をますます煽った。

——私は一体何をやっているんだ？

自分が未だ大人に成りきれていない事はわかっていた。しかし、三十を超えて、なお子供一人扱えないとは、なんとという未熟さ……………、

——いや、それだけではないな。

多分、自分はこの少女が憎いのだ。保護者ぶっているのも、上っ面だけで、やはり心のどこかで、この少女を恨んでいるのだろう。そう考えると、先程の一言も、教育者として子供を叱っていたのではなく、ただ自分の怒りをぶつけたかった故なのかもしれない。

確かにこの少女への好感はある。しかし、

——……………情けない。

フウルウは自分の不甲斐なさに舌打ちした。

——私の有り様は私によって決まる。あの時、鶴を庇ったのは紛れもなく、私の意思だ。

ならば、これは自尊心への正当な代価ではないか。それとも、私はこの少女への憎悪に支配される文字通りの傀儡と成り果てたいのか？ 私はこの少女に一生囚われて生きていきたいのか？

なるべく考えないできた怨慕をフウルウははつきりと自覚した。認めたくない自分を認めざるをえなかった。

「……………夜通しの調整でお腹が空いたろう」

フウルウは口調を変えた。こんな情けない自分を鶴に悟られるわけにはいかない。ましてや、ディーナザードには言わずもがな。あの小娘はあれで自分にも他人にも厳しい。こんな自分を見たら、軽蔑するに違いない。たとえ、顔では笑っていても……………。絶対に見せるわけにはいかない。

「何が食べたい？」

「ええと、申し訳ありませんが、まず両替を」

鶴は照れた表情で帝国一級通貨の持ち合わせがない事を示唆する。そんな自分には子供にとって頼れる大人に見えないかとフウルウは苦笑した。

「私にだって誇りはあるよ」フウルウは嫌味にならないように恭しく振る舞った。「我が君の経済問題はこの帝国公認三等会計士ピャオ・フウルウにお任せあれ」

「ですけど、フウルウさんのお財布は確かシャービス亭に……………」

二人の間を沈黙が支配する。

鶴の口調は丁寧で嫌味のないものだった。それだけにフウルウは気取った言い回しをした自分がこの上なく滑稽に思えた。

「……つまり、何をするにも、シャービス亭に戻らなくてはいけないのか……」

大の大人が十二の少女に財政面で援助を受けるとするのは、なるべく避けたい。

「まいったな。あの誤解を解くのはなかなか難しい……」

「あの、先程から気になっていたので……」 鶴はいつもの古めかしい言葉使いで尋ねる。「誤解って、何の事ですか？」

「うむ。いや、ディーナザードの奴が本当に誤解しているか否かというのは、また微妙な所だね。例えば、ディーナザードがまだ私の弟子だった頃には……」

「弟子？」 鶴は小首を傾げた。

「ああ、説明してなかったか。私がこの村で教師をやっていることは言ったよね？」

「はい。そして、あのシャービス亭で格安で授業を行なう代わりに、格安であるのシャービス亭に寝泊りしている。言わば、この村の客人であると」

「……まあ、客人というほど、大した存在でもないんだけどさ」

ふと、フウルウは、己が研究対象たる『食客』たちはもつと堂々とした態度だったなど不甲斐なくなってきた。

「……あそこで、色々教えているのは事実だよ。だが、私が主に行なっているのは初等教育から中等教育までだ」

それ以上を望むものはもつといい教師を求めて、帝都へ行く。……ということはフウルウ自身の名誉のために黙っておくことにした。

「で、私はもう数年この村で、そんな生活を続けている。だから、この村には私の元弟子、卒業生がうじゃうじゃいるんだ。で、ディーナザードはその最初の弟子なんだよ」

……実は最初の弟子というだけでなく、最高の弟子でもあった。自然哲学、特に数学分野における彼女の探究心と理解力はずば抜けたものがあつた。

例えば、フウルウが借りてきた占星術の本へ、ディーナザードが異様な関心を示し、夜中に勝手に盗み見ていた時期があつた。フウルウは

——星占いに興味を持つとは、乙女らしいところがあるではないか。

と、微笑み、同時に苦笑いをした。どうせ、長続きをしないと考えたからだ。何しろ、その頃、まだ、フウルウは彼女に三角関数を教えていなかったのである。当然ながら、三角関数を体得していなければ、天文学の基礎となった高度な占星術を理解できるわけがない。しかし、フウルウは底意地の悪さを發揮し、ディーナザードには何も言わなかった。

——フハハハハハッ！ 隠れてこそこそ私のモノに手を出した罰である！ 苦しみ、悶え、己の無知をたっぷり嘆くがいい！

と、実に大人気ないことをフウルウは考えていたのだ。ところが、彼女は最初こそ手こずったものの、その内、すらすらとその占星術の本を読みこなすようになっていった。どういうことかと不思議に思ったフウルウはそれとなくディーナザードを探ってみた。すると、彼女はいつの間にか、三角関数の基本を（記号などは独特なものであつたが）利用していたのだ。続いて、これを誰に教わったのかと尋ねると、当時、十五にもなっていないかつたディーナザードはこともなげに答えた。

『自分で考えた』

フウルウは愕然とした。彼女は、過去に三角関数が生まれた歴史的経緯とほぼ同じものを脳裏で展開し、たった一人でそれを半ば完成させていたのだ。驚嘆せぬはずがないではないか。そして、己の半分も生きていない少女に嫉妬した。フウルウ自身は彼女と同じ年頃に著名な教師の厳格な教育の下で、散々苦勞し、ようやく三角関数を身に着けたのである。この差はいつたい何なのだろうか？ 無論、フウルウも知識人の端くれ——嫉妬しているばかりでもなかった。彼女の才覚を埋もれさせるのは惜しいと、ディーナザードに大学へ行くことを勧めた。三角関数をここまで理解できるなら、すぐに測量師などの資格を習得できるだろう。《ウルル》入りも夢ではない。彼女自身にとってもいい話である。フウルウはそうやって誠心誠意彼女を口説いたものだ。ところが、ディーナザードは再びこともなげに答えた。

『えー、だって、大学って、先生と同じ根暗で引き籠もりなオタクの巣窟でしょう。あたし、そんなところ、やだー』

……あの時は、本気で絞め殺してやろうかと、思った。

いずれにせよ、彼女は大学行きを拒み、フウルウはそれを——正直今でも——惜しみつつも、二人はミナレット村に留まっていた。

そして、『卒業』後も、時たま数式や図表を弄んでおり……要するにこいつもこいつでオタク娘なのだが、今や理数系についてはフウルウをも超えているだろう。……と、いうことも、悔しいので、やはり、黙っておくことにした。

ただし、鶴の方は勝手に「ははあ」と何やら納得してくれたらしい。

「それで、あの方はフウルウさんのことを先生と」

あれは完全に嫌味なのだ——ということも、フウルウは言わないでおいた。

「ところで、最初の弟子というのは？」

「もう、五年くらい前になるのかな。私がこの村にやってきた時は、そんなにここへ居座るつもりはなかった。ただ、あのシャービス亭にいる間、自分のアツザフル語を試すがてら、あの小娘に数学の話をすることにしてみた。そしたら、それが《亜父》——あのシャービス亭の先代所有者であり、ディーナザードの養父——の目に留まった。『代価は払うから、正式にこの娘に学問を教えてくださいださらんかな』と、ね」

「養父？その方は？」

「……他界された」フウルウは己の涙腺が緩むのを自覚した。「亜父は素晴らしい方だったよ。あからさまに怪しい異邦人だった私を受け入れてくれただけではない。私に教師になつてくれと言ったのも、私の貧しい懐具合を心配してくれた故だろう」

「あ……。すいません」

鶴はまた頭を下げた。頭のいい子だ。しかも、夏語^{シヤ}を解するだけのことはある。フウルウがディーナザードの養父を《亜父》すなわち《父に亜ぐもの》と呼んだ辺りで、その関係を察したのだろう。

フウルウは謝罪を手で制した。「いや、いい。話を戻すが、この村は小さいからね。子供に読み書きぐらいいは教えたいと考えていた他の村人の耳にもそれが伝わった。で、その子たちも受け入れ始めた辺りで、私もこれでは生計を立てられると気付いた。それで、かつかつの生活をしているうちに、阿父が病死なされて、ディーナザードがシャービス亭を相続して、その内、私が彼女に教えられることがなくなってきたので、なんとなく

卒業して、今に至る」

考えてみれば、長い付き合いである。フウルウが家族以外とここまで長い関係を築けたのは初めてのこともかもしれない。似たようなことを考えたのか、鶴は妙なことを言い出した。

「あ、では、お二人はもう……」

「そういう言い方はやめてくれ」

頬を染めた鶴の言葉を断ち切るようにピシャリと言い放つ。鶴は怯えたように「ご、ごめんなさい」とまた頭を下げた。フウルウもきつい言い方であることはわかっていた。鶴にも悪気があったわけではない。が、フウルウは言葉を改めはしなかった。

結果的にとはいえ、若い——フウルウはまだ自分を若いと思っている——男女二人が共に暮らしているのだ。村の中にも、変な勘繰りをしてくる者は少なくない。不愉快なのだ。

「……彼女との付き合いが長いのは事実だ」

だから、ディーナザードのことがまったくわからないというわけでもない。フウルウは言外にそういう自信を匂わせた。

「例えば、歴史の授業の時、彼女はいつも白墨が六本入る程、大口開けて寝ていた。全く嘆かわしい事だろ？とところが、ムフウウイリチャハラ 建国の四聖ムジャヒド ≪勇者≫ファティマの妊娠失踪の噂とかになると、爛爛と瞳を輝かせて私に質問してきた。要するに、あの小娘は下賤な情愛の纏れ話が好きなんだ。だから、今回の一件も私をからかう為に誤解したがっている面があると思う」

フウルウもこれに関して言いたい事がたまっていたので、強い口調で言葉を並べる。生真面目な鶴は一つ一つ首肯していたが、一通り聞き終えると、別の言葉で同じ質問を繰り返した。

「それで、アルルシャービスさんは一体どのような、そしてどうして誤解をしているのですか？」

「……」

鶴はフウルウの表情が形容し難い動きを見せているのを不思議そうに見つめていた。

「……あの、ひよつとして、わたしの発言にまずい所とありましたか？」

「まずい所と言われてもな……」

まずくない所など微塵もないのであるが、それをこの少女に伝えて、ではどのようにまづい発言だったかを具体的に説く自信を、フウルウは持ち合わせていない。同時に、この場にディーナザードがいない事を——身勝手とは思いつつも——心底、残念に思った。なんとなく、彼女なら喜んで説明する気がする。詳細に、丁寧に、具体例を交えながら……いやいや、ひよつとするとそれだけに留まらないかもしれない。あんなことや、こんなことも……。

「ぬうううっ、ディーナザードっ、このような少女になんということ……！」

「ふ、フウルウさん？ どうしましたか？」

「い、いや、何でもない」

——……私は一体何を考えているのだ？

フウルウは頭を振って、妄想をかき消そうと努めた。どうも、さつきから一人芝居を延々と繰り返している気がしてならない。

「いや、つまりね。君のさっきの説明はかなり曖昧な表現だったろう」

「はい。ですが事実をそのまま話すのはもっとまずいのでは？」 鶴は少々、声を潜めた。「ここでは『傀儡の術』は禁忌なのでしよう？」

「いや、禁忌というか……まあ、死体を弄繰り回すのは不道德だろうし、死体の定義は概ね心臓の停止した肉体だねえ……」

「だったら、わたしが心臓の停止したフウルウさんの体をいじったなんてばれたら、面倒な事になるのでは？」

なる。間違いなくなる。

倫理面の問題だけではない。鶴の行なった巫術の内容は技術的に特筆すべきものなのだ。大いに世間の注目を集めるに値するものなのだ。そして、それ故の無用な厄介ごとくも集めるものなのだ。だから、フウルウはその対策として、『鶴は自分の知人の娘で、しばらく預かる事になった』というでっち上げ話をディーナザードには通すつもりだった。

「その通り。しかし、あの時、私と君が【契約】しちゃったのをああいふ風に表現すると……まずいんだ」

鶴は訳がわからないといった表情を浮かべる。

ひよっとしたら、ディーナザードがフウルウと鶴の関係を仮に誤解したとしても、それは鶴にとって、それ程まずくないのかもしれない。

鶴の故郷の話はまだ詳しく聞いていない。だが、彼女の名と扱う固有名詞から判断するにフウルウの故郷である『夏の国』よりも更に東——『根の国』辺りが候補となりえる。

さらにここから先は憶測になるが、『夏の国』と船の往来があることを鑑みるにエンチウ島^{モシリ}ではないだろう。また、鶴の肌の白さや厚着に慣れている様子から考えて、ニライカナイ（島）とも考えにくい。したがって、堅州島^{カマス}あたり——が鶴の出身地であろう。

このアツザフル帝国から見れば、いわゆる未開の地だ。初潮がきたら結婚適齢期——という倫理観も残っているだろう（実際、この田舎町のミナレットはおろか、あの帝都ムンダペレも最近まで似たり寄ったりだった）。

だから、フウルウ自身も染まっているアツザフル帝国の道徳——十二歳の女性というのはまだまだ子供であり、子供に手を出す事は大変な背徳の行ないであるという事——を鶴が知らないだけなのかもしれない。

「……まあ、とにかくシャービス亭に戻ろう」

フウルウは提案した。ここで悩んでいても事態は解決しない事だけは確かだ。

「ディーナザードは、本当は——いや、本当に頭のいい娘だ。話せば、わかってくれる」

「話すって……どこまでですか？」

「全てだよ。君のいう通り、嘘は良くない」

下手にごまかそうとしたから、無用の誤解を招いたのだ。

「真実を告げれば、子供に手を出した変質者の汚名は返上できるさ」

「つまり……」 神妙な面持ちでディーナザード嬢は話を要約した。「昨晚、狼に襲われている美少女鶴ちゃんを庇うなどという、らしくもない英雄的善行の結果、あなたは文字通り

致命的な大怪我を負った。たまたま鶴ちゃんは美少女巫術師だったから、狼の撃退には成功したものの、このままでは絶命必至。いや、心臓が五分くらい止まっちゃたから、ある意味、完全絶命。ところがどうしても死にたくなかったあなたは美少女天才巫術師鶴ちゃんに頼み込んで、脳細胞が酸素不足で壊死する前に、生命維持に必要な臓器及び脊髄、小脳、間脳その他諸々の機能の一部をそこから中からかき集めた精霊による結晶細胞で代用しようとする。なんとか、脳細胞壊死は免れたものの、脊髄その他の損傷箇所の復元や、代用臓器の調整に、結局、一晩かかってしまった……と」

己のきつい三つ編みをかき上げ、ディーナザードは彼の説明を鼻で嗤った。

「三十分も費やした朝帰りの理由にしては稚拙ですね。虚言家兼変質者のピャオ先生？」

「いや、本当に本当なんだ！」

必死に弁解してはいたものの、フウルウは、

——多分信じてもらえないだろうな……

と、内心諦めていた。いや、むしろ、信じてほしくないとの思いすらある。教師として、こんなヨタ話を鵜呑みにする生徒を育てた覚えはない。

第一、鶴はまだ十二なのだ。

かつての様に言語巫術が一部の者たちの独占技術だった頃——《巫術師》^{カムナギ}という言葉が現在の様に技術者ではなく、特権階級の代名詞だった時代——なら、簡単な祝詞を唱えることができれば、それだけで巫術師と呼ばれていた。だから、鶴くらいの歳で巫術師と呼ばれることも、珍しくなかったろう。しかし、今は違う。簡単な祝詞ならば、フウルウの生徒達ですら操れる。元々、言霊や祝詞とは言語を多角的、数学的に分析した延長線上にあるものであり、読み書き算盤といった初等教育との共通点も多い。まして、高等教育を受けたフウルウならば、アッザフル建国以前には、間違いなく、巫術師と呼ばれたであろう巫術を扱える。

だが、フウルウは巫術師ではない。簡単な巫術が普及している故に、生半端な実力では巫術の専門家である巫術師とは呼ばれないのだ。

そして、それだけの巫術を身につけるには、十年の年月が必要とされる。

翻って、鶴はどうか？

たしかに、巫術という技術は『精霊の効率的な使役』を目的としているものの、現実問題、いわゆる干渉力——精霊との通信速度、情報共有率、命令優先性——《縁の深さ》に大きく左右される。実際、鶴はそれらに優れている。妙に歪だが常人よりも大きい鶴の干渉紋にはディーナザードも気付いているだろう。また、語学や算術と同じ様に、筋のいい者は常人よりも、習得が早いだろうし、その性質上、語学や算術以上に幼少期の教育は重要になる。

また、あの漆黒の法衣——あれは精霊結晶繊維、すなわち、^{カムミン}神御衣だ。

しかし、いくらなんでも、鶴は若……というか、幼な過ぎる。ディーナザードはそう考えているのだ。

いや、そもそも、狼を退けたことはともかく、体組織の多くを精霊と入れ替えるなど……。そんな荒業は、仮に鶴が天才で、しかも熟練している巫術師だとしても……、フウルウは虚無的な疲労感に襲われた。

本来なら、フウルウが幾千の言葉を重ねるよりも、実際にここで鶴が幾つかの巫術を見

せた方がはるかに効果的なのだ。しかし、現在、フウルウの体内は未だ不安定な状態である。だから、それを支えるために鶴の精霊使役力は限界ぎりぎりの稼働状態だ。冗長度が零ということはないだろうが、無理が祟ると、即フウルウの生命維持に支障が出る。余計な負担は避けねばならない。

だから、何とか、言葉で誤解を解かなくてはいけない。

「ほら、この傷見てくれよ！」

とりあえず、フウルウは服を脱ぎ、昨日、できたばかりの傷の中でも特に大きなわき腹の傷跡を見せるが……、

「……そんな古傷あったんだ」ディーナザードは別の意味で驚いただけだった。

「昨日巫術で治したんだよ！！」

「言われてみれば、少し不自然な傷痕だけ……それをあたしに見分けろと？」

「……」

裂傷などの場合、自然治癒の痕跡と巫術治癒の痕跡との区別は極めて難しい。そもそも、後者は血小板などの働きを精霊に代行させたりもするので、自然治癒の精霊による再現ともいえる。だから、傷跡から、治癒過程の巫術による介入の有無を判断するのは難しい。せめて、あらが残っていれば、素人目にも、施術跡がわかるのだが——フウルウは頭を抱えたくなった——鶴の医療措置の完璧さが裏目に出たというわけだ。

「ああ、もう、ほら、鶴からも何か言ってやってくれ！」

「あの……輸血もしました」全然、事態の好転させない補足をする鶴の額には緊張のせいか玉の汗が浮かんでいた。

「……いや、もつと、ちゃんとした説明が必要だろう……」

「……わたしがO型だということですか？」

「そうじゃなくて！」

「えつと、とにかく」少し、鶴は考え込む素振りを見せ、「昨日わたしはフウルウさんと、とても人様に言えないような事をしてしまったので、もう、フウルウさんと一生離れる事はできないんです。フウルウさんはそういう肉体になっちゃたんです」

「……先生、わざわざ汚名を挽回しにきたの」ディーナザードの冷めた声が響く。

「違う！違うんだ！ディーナザード！だから、昨日の夜、私たちは人には言えないような契約をしてしまったんだという意味なんだ。この《傀儡の術》の凄さは君だって、わかるだろう！うかつに公にすれば、必ずや厄介事を招く！だからとりあえず内密にしよう！そういう意味なんだ！」

「契約というのは、フウルウさんがそれ望み、わたしの奴隷として第二の人生を送ることを誓ったっていう事なんです」

「……奴隷？」ディーナザードの表情筋はますます微妙な動きを見せる。

「便宜上だ！ 便宜上！」

何故、鶴は事態を混乱させるような単語を連発するのか？——フウルウは問い質したい衝動を押え込んで、鶴がまき散らす混乱を必死に回収していた。

「で、置き換えた精霊で私の体を二十四時間維持するためには、一日に一回程、鶴の調整を受ける必要がある。故に私と鶴は、当分の間、離れて暮らすことができない。そういう体になってしまった。鶴はそう言いたいんだよな！」

「ええ、まあ、一応のところは」
「もっと、力強く同意しろっ！」

ひよっとして、鶴はディナザードのような娘が苦手なのだろうか？ どうも、シャービス亭に再び入った辺りから、この少女本来の知的律動性を失っているような気がする。しかし、普段の鶴を知らないディナザードにそれを主張しても、受け入れられるはずがない。結局頼りになるのは自分だけだ。

——では、どういった路線で説き伏せるべきか？

フウルウが呼吸を整えながら、悩んでいると、ディナザードの方が突然優しい笑みを浮かべ、鶴に語りかけた。

「鶴ちゃん、この危ない小父さんに、どういう風に脅かされているの？」

「誰だよ！ 危ない小父さんってっ？」

フウルウを無視して、ディナザードはじつと鶴を見つめた。ところが……、

「……あ、あの、申し訳ありませんが」何故か鶴は頬を紅潮させていた。「フウルウさんの部屋に……はあっ、寝具はありますか？」

「ええ、それはあるけど……」

「……よ、よかった……お願いします……はあっ……事情は……後で……説明しますから……わたしとフウルウさんを……その部屋へ……はあっ……行かせて下さい……」鶴は悶え声でディナザードに訴えた。「早くしないと、わたし……もう、我慢できない」

「な、何を言っているんだっ？ 鶴！」

「……先生、本当にこの娘に何したんですか？」

「だから誤解だっ！」

「……あたしもね、最初はからかっていただけなんですよ。でもこれは……」

「信じてくれっ！！」

バタン。

言い争っていた二人がその物音にゆっくりと首を動かすと……

少女は床に倒れていた。

「こ、こんな小さな娘に倒れるまで要求するなんて……！」

「違うっ！」

鶴の額の汗は雫となって流れ落ちた。

「で、どうだ、あの娘の様子は？」

鶴が倒れ込んだ後、二人は慌てて彼女を二階の一番立派な寝台へ運んだ。だがすぐにディナザードが鶴の湿った下着を取り替えるという名目でフウルウを追い出したため、彼はシャービス亭の一階をグルグルと六十七周する羽目になった。とりあえず、大事ではないという報告を受けてからは、表向きは落ち着きを取り戻したフウルウだったが、ディナザードが階段を降りてくる度に「で、どうだ、あの娘の様子は？」という質問を繰り返していた。

「大分落ち着いたわ。結構無理してみたいね。倒れるまで我慢しているなんて」

私は守り役失格だな——フウルウは後ろめたい気分になって、デイナーザードの金色の双眸からも目を逸らした。

その奇しき眼光は北方系の中でもごく稀にしか顕れない。そして、その不思議な瞳の輝きに見つめられると、フウルウは背中中の辺りがゾクゾクするのを感じるのだった。しかも、デイナーザードは女性にしては背丈が高い。成人男性であるフウルウとほぼ同じ目の高さである。だから、その双眸を厭でも直視せざるを得ない。その上、デイナーザードの服飾は相変わらず体の線が出やすい。だから、すらりと引き締まっているその流麗さが目立ち——そこに年齢以上の威厳を感じてしまう。

……何故、十以上も年下の小娘にこの自分が緊張せねばならないのとかと、フウルウは常々理不尽に思っている。

——いや、むしろ、私が普段と同じ反応を示すことに安堵すべきか。鵺が気を失っても、私の肉体は正常に稼動するという証左なのだからな。

フウルウはそこまで考えて、頭を振り乱した。どうも、昨日から調子が悪い。考えれば考える程、自分を抜き差しならない所に追い込んでいく気がする。

そういえば、今日は客が来ない。元々客が多い方ではないが、それにしても少な過ぎる。

デイナーザードが事態を重く見て、臨時休業にでもしたのだろうか？

「大丈夫なんだろう？」

「ええ、程度は酷くても、ただの疲労と貧血だから、安静にしていれば……でもさ」デイナーザードは遅めの朝食兼早めの昼食をフウルウの机に置いた。「あたし、本気で勘ぐっちゃいますよ。あの娘との関係……」

「……今までは本気ではなかったと？」フウルウは苦笑せざるをえない。

「疲労はともかく、貧血ってどういう事？」

フウルウは昨日から何も食べていないので、早速手を伸ばす。だがその指を彼女は窘めるように叩いた。食べるのは質問の後——と視線で語っている。

「栄養状態はそんなに悪くないのに、血液だけが不足しているなんて異常よ」

「そうだな、あのお年頃にありがちな話としては……」散々からかわれたフウルウは軽い反撃を試みた。「あの日か？」

「多分、あの娘はまだよ」この手の話が大好きだった娘の声は硝子の様に固い。

「へえ、凄いな。脈を取っただけでそこまでわかるなんて……、いや、悪かった」

デイナーザードの苛立ちを察したフウルウは軽口を中断した。フウルウには彼女が倒れた原因が推察できるが、デイナーザードにはできない。フウルウにしてみれば、容態が大事ではないとわかった今、鵺の回復は既定の事だ。しかし、デイナーザードは違う。不安がるのも無理はない。

「あの娘、造血器官に疾患でもあるの？」

「だから、本人が言っていただろう。私に輸血したんだよ。もつとも採血の跡は自分で消しているだろうけどね」

「……本当なの？」

「最初からそう言っている……」

「じゃ、本当にあなたは今《傀儡の術》で動いているの？ あの娘、あの歳で巫術師なの？」

「後者は肯定^{ナム}。前者は……《傀儡の術》の定義次第だな。第一級禁制巫術にも《傀儡の術》

と呼ばれるものはあるしね」

「……確かにあなたの話が真実なら、第一級禁制巫術の《傀儡の術》とは趣が異なるわね——いえ、むしろ正反対かしら」

第一級禁制巫術の《傀儡の術》とは、催眠暗示効果の高い薬物を大脳に投与し、かつ巫術で大脳付近の精霊に干渉し、人間の人格——大脳の感情や情動を司る部位——のみを完全に破壊し、外部からの刺激に、機械的に反応する文字通りの人形、すなわち《傀儡》を製造し、その傀儡を巫術で操作する技術のことだ。基本的には薬物と巫術による催眠の延長であるが、その内容は既に脳外科手術による洗脳の領域に達している。

ただ、この《傀儡の術》——概要はともかく詳細は謎に包まれている。アッザフル王朝がその情報を徹底的に管理し、外部に流出することを規制しているからだ。

初代丞相が法治主義者であり、それなりに開明的であるこの帝国において、こんな情報統制が行われているのは、単に洗脳の技術だからというだけではない。

この技術は人格を麻痺させるのではない。この技術は人格を破壊するのだ。

そのため、仮に《傀儡の術》から解放されても、廃人化は免れない。故に現王朝であるアッザフル王朝では《傀儡の術》はある種の殺人、そして《傀儡》は特殊な死体と見なされている。

この殺人及び死体損壊に該当する第一級禁制巫術《傀儡の術》とは、元々、前王朝であるウトナピシュティム王朝の特権階級であった世襲制巫術師達が理想的な奴隷——すなわち《傀儡》を製造、制御するための技術であったらしい。

今では考えられないことだが、当時はこの《傀儡の術》は合法技術で、絶対の忠誠心を期待できる文字通りの《傀儡》は珍重されていた。おそらく、単なる重犯罪者——思想犯を含む——への矯正処置ではなく、前王朝の支配階級であった世襲制巫術師達が被支配階級へ、巫術という独占技術の力を見せつける意味もあつたのだろう。

そして、前王朝の後主であるマルドゥックが《狂王》の名を冠しているのも、彼がこの《傀儡の術》を臣民全てに施し、ただでさえ、マルドゥックの圧政に苦しむ奴隷であった民衆を、さらに家畜に改造しようとした故といわれている。

そこにさっそうと現れたのが四人の聖者達。精霊に選ばれし伝説の勇者ファティマ、後スルタンの皇帝である覇者ザッバーク、西方より来たりし異形の賢者ミンガラム、夏の国の公主と言われる謎の易者祝融。後世から『建国の四聖』と呼ばれることになる四人の男女により、革命は成され、狂王は倒され、人々はウトナピシュティム王朝の圧政から解放されたのでした。めでたしめでたし——というのが現在のアッザフル王朝の創設の概要として、人々の間で語り継がれている。

無論、歴史学者志望のフウルウやその薫陶を受けたディーナザードにしてみれば、疑わしいところだらけだ。特にマルドゥックが臣民全てに《傀儡の術》を施そうとしたというのは明らかに——おそらくアッザフル王朝によって、意図的に——誇張された風聞であろう。だが、ウトナピシュティム王朝の横暴によって、革命が誘発されたのは、誇張されていないようにも、捏造ではない。そもそも、この技術の存在そのものが、前王朝の民衆に対する認識と政策を如実に示している。

それだけに、前王朝を悪の権化とし、自らはそれを滅ぼした善の権化であるとする現王朝にとって、《傀儡の術》は忌むべきものだった。

いや、そういった現王朝の意向がなかったとしても、この時代のまともな人間ならば、この術の存在自体を拒絶するだろう。フウルウが鶴との関係に神経質になったのは無理もない。

しかし、ディーナザードの言の通り、フウルウに施されている《傀儡の術》と、アツザフル王朝第一級禁制巫術《傀儡の術》は全く違った代物である。元々、後者の《傀儡の術》には副作用が多い。

劇薬を投与するのだから、無理なからぬことだが、普通、《傀儡の術》を施してから、三日三晩は目が覚めないし、三割ぐらいは永久に目を開かない。

加えて、運動能力は著しく劣化し、動きが緩慢になる。そもそも、人格——人間の最大の長所である知性を破壊するのだ。創造的活動などできる筈もなく、単純労働をこなすのが精一杯になる（あるいは傀儡の術はあくまでも奴隷を造り出す技術であり、奴隷に不要な能力の削除も包括しているのかもしれない）。

また、いかに大脳付近が元来、人体で最も大量の精霊が寄生している場所とはいえ、薬物の流れを完全に制御できるわけではない。都合よく、大脳の感情や情動を司る部位だけを破壊するのは不可能だ。どうしても、他の部位に損傷を与え、その部位に対応する能力に欠陥を生み出す。加えて、言語野も傷つくため、口答での命令受け取りに支障が出る。そのために、それこそ牛馬の様に鞭打って、身体で覚え込ませ、根気よく命令を繰り返すか、あるいは巫術で直接神経系に介入し——実際にはそれら全てを複合して、調教をしなくてはいけない。

それでも、死体を無理矢理動かすようなぎこちなさが残る。傀儡が『生ける屍』と呼ばれる由縁だ。

翻って、フウルウはどうだろうか？

とりあえず、目は開いているし、三日三晩、寝込んだわけでもない。

動きは多少鈍い上、ちよつとふらふらしているが、元から鋭敏な方ではない。それに、怪我から回復したばかりなのだ。特筆すべきことではない。

そして、何より、フウルウはいつもの様にべらべらと喋っている。ここまで滑らかに、きびきびと『話す』という自律的論理的行為は、『生ける屍』には不可能だろう（しかも、操り主である筈の鶴は寝込んでいるのだ）。

「やっぱり、明らかに違うわ」ディーナザードは以上の事実を元に断定した。「前王朝のそれは精神的傀儡術といふべきものであるのに対して、鶴ちゃんのは肉体的傀儡術とでもいふべきかしら？ 名前と恒常的人体干渉巫術であること以外に何の共通点もない」

ましてや、鶴の《傀儡の術》は救命活動だった。確かに、無用な誤解や偏見はある。倫理的にも問題がないわけではない。それでも、理解を求めることは不可能ではない。とはいうものの……。

「根本的に信じられないけどね」

と、なまじ知識があった場合は、こう言われるので、フウルウはあえて偽りを口にしたのだ。

「いくら、祝詞の体系化が進んだからって、そんな人間業じゃないわよ」

組織を精霊と入れ替えるなど、人体はそんなに簡単なものではない。

基本的には催眠術の延長線上にあり、生理機能は傀儡の肉体に一任しているウトナピシ

ユティム王朝の《傀儡の術》ですら、傀儡専門の巫術師である傀儡師を必要としたのだ。認知宇宙で、最も精密で繊細な自律システム——すなわち、ヒトの生理機能を精霊に代行させるなど、巫術師にかかる負担は尋常ではない。

「しかし……随分詳しいな」フウルウは先程からの感嘆を素直に口にした。

フウルウは教師として、教え子であるディーナザードを評価していたつもりだ。しかし、正直、ここまで詳しいとは、思ってもいなかった。

すると娘は素っ気なく、「昔、取った杵柄よ」と答えた。

「いや、大したものだ。どうやら私は君を侮っていた様だな、ディーナザード、許してくれ」

「……まず、あたしを騙そうとしたことを謝罪すべきじゃない？ もっとも、その前に、真実を語って欲しいけどな」

「そうだね。前者に関しては謝罪しよう。だが、後者に関しては全て真実だ。多分」

「多分？」

フウルウは再び苦笑した。だが、その苦笑はなかなか信じてくれないディーナザードに対してではない。自分ですら真実かどうか、確信の持てない話を、他人に真実だと、主張しなければならぬ自分自身に対してである。実際のところ、フウルウには話すべき事実はおろか、今の自分の精神状態にすら、信頼が置けないのだ。

脳に靄がかかっているとでも言うべきか、現実感がつかめない。有り体に言って、夢を見ている様な感覚なのだ。『生ける屍』という評価も、それ程、的外れではない。

もっとも、これに関しては幸運ともいえるかもしれない。もし、まともな精神状態だったなら、この現実をあつさりを受け入れられたか否か怪しいものだ。また、自分の死の原因である鶴に対して、どんな態度をとったか、不安にもなる。こんなの状態ですら、鶴には酷いことを言ってしまった。多分、本来の精神状態だったら、鶴に、いや、周りの人間全てにもっと当たり散らしていただろう。

おそらくはこの金色双眸の娘にも……。

——はたして、その時、この小娘は自分を嫌うだろうか？

「そもそもさ、あたしがその話を信じると思っているの？」

——多分嫌うだろう。

「……これでも信じてくれる見込みのあるところと、どうしても話さねばならないところだけを話したつもりなんだがね」

「呆れた。大体、あなたの言っていることが可能なら、不具や老化だって人は超越できるわ。それこそ、人造人間だって作れる」

鋭いな——と、フウルウは密かに感心した。

「でも、そんなこと二百年前でもなきや無理よ」

「いや、仮に二百年前からの精霊衰退化現象以前の精霊密度をここに再現したとしても困難だろうね」フウルウは師弟時代の様にかつての教え子に語った。「第一にヒトの複雑怪奇な生理機能を精霊に代行させるだけの処理能力が人間にはない。それに……」

「そんな莫大な量の精霊を常時、使役させ続けるだけの干渉力も人間にはない？」

「ああ、少なくともそんな存在を私は鶴以外に知らない」

まかりなりにも、歴史学者を志すフウルウである。自分が知らないのであれば、史実の

中にその様な人間は確認されて……。

「いや、民間説話とかまで持ち出せば、いくらでも例はあるけど……」

たかだか、二百年程前の狂王マルドゥックや、クワデイルイリィチャハラー建国の四聖、スィフィリィリィチャハラー流浪の四仙などにさえ、誇張や誤植の類としか思えない資料が山程ある。むしろ、正確な事実を伝えているものが少ない。アツザフル王朝によって『ウルル』という大規模学術機関が設立された前後ですら、この有様なのだ。それ以前の記録など、荒唐無稽の雨嵐である。まして、アツザフル帝国や『夏の国』などのいわゆる先進国の影響がない原始共産制社会では、歴史と神話の分離すらなされていない。どんな無茶苦茶な話でも、探せばあるだろう。

「でもそれって迷信の類でしょ」

「まあ……ね。十把一からげに否定はできないだろうけど……」

こと精霊関連の説話に関しては、現在の精霊密度がアツザフル建国時の約半分になっていることを考慮せねばなるまい。しかも、これは『神々の揺籃』と呼ばれる程の精霊密度を誇る『アルリマデイナー帝都』ムンダペレの場合であり、このミナレットなどは、それをさらに下回る。だから、一見無茶苦茶な記述であっても『現在ではとうてい無理だろうが、当時の精霊密度なら可能だったかもしれない』というわけで、事実の確認を極めて困難にしている。

「ただ、鶴の離れ業にはそこいらの迷信よりは説得力がある。あの娘はね、必要に応じて自分の干渉力を増幅しているんだ。今は『人間離れしている』という次元だけど、あの娘が本気になれば……」

「ちよつと待って」デイナーザードはフウルウの言葉を遮った。「干・渉・力・を・増・幅・？ そんな方法あるの？」

「ある。俗に言う『カムガカリ神憑り』——学術的に言う『外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法』だ。基本的には、あの女媧娘々が、かつてウルルで発表した論文と同じものさ。私も一度目を通した事がある……というか、昔、授業で説明した気がするぞ」

「先生の授業なんて……いえ、言っても仕方がないですね」

デイナーザードは何故か溜め息を吐き、話を元に戻した。

「……で、その『外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法』とやらを使えば、その化け物じみた干渉力も納得いくわけね？」

「ああ」一回で暗記するデイナーザードにフウルウは少し感心し、「ついでに処理能力の不足も補える」

と、実に素晴らしい技術だ。ところがそれをデイナーザードは知らない。つまり普及していない。というところは……、

「『外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法』の問題点は？」

「第一にこの干渉法を実行しようとする何故か精霊がこちらの命令を受け付けられない。多分、精霊なりの禁忌に触れるんだろう。これについてはいくつかの抜け道が考えられる。第二にこの干渉法はやたらとややこしい。とても常人の干渉力では実行不可能だ。第三の理由は第二のものとも絡んでくるんだが、この干渉法はあんまりにもややこしいんで、干渉主体たる人間の方だけでなく、被干渉体である精霊の方にも負担をかける。そして、現在の精霊密度ではそんな複雑な命令を実行するだけの余力が精霊の方にない」

「……つまり、先生が鶴ちゃんを毒牙にかけた事実を闇に葬るため、あたしを騙そう

としている——と？」

ディーナザードは真面目に聞いていた自分が愚かだったと言わんばかりだ。

「そう言われるのが嫌だったから、真実を話したくなかったんだ」一方、フウルウはどうにもならない現実に投げやりな口調にならざるをえない。「まして、再現実験をやってくれるはずだった鶴は寝込んでじゃうし」

ふてくされる三十過ぎの男に、小娘は久しぶりにクスクスと笑った。そして、フウルウに近寄り、何故か師弟関係だった頃の口調で、話しかけた。

「なら、とりあえず、先生の言葉を信じさせていただきませうわ」

「……と、いうことでそろそろ、食事に手をつけてもいいかな？」

「……暖め直しますよ」

「感謝する」食事をひとまず下げるディーナザードの背中を見ながら、フウルウは言っておかねばならない事を思い出した。「そうだ。鶴が起きてから、多分、詳しい話を聞く事になる。で、十中八九、君はあの娘の師匠兼母親——すなわち、師母について疑問を抱くだろう。だが決して、師母の悪口を言っってはいけない。決していけない。断じていけない。絶対いけない」

「何故？」

「……」

もし、そんな事を口にしようもんなら、首を刎ねられるからさ——とは流石に言えず、フウルウは言い方を変えた。

「……鶴は師母の事を尊敬しているからね。あれで結構気性の激しい所も有るし」

少なくとも嘘ではない。鶴にとって、師母は唯一絶対、全知全能、神聖不可侵にして、無限の慈愛を持つ存在であり、その無謬性を汚すものには死あるのみ——少なくともフウルウの芳しからざる経験は、それを如実に証明している。

「……また、あたしに隠し事？」

「嘘ではない」

「うん。だから、嘘ではないけど隠し事があるでしょう？」

「……君が一体何を疑っているのか、はさっぱりだな」

——何故この娘は自分が隠し事をしようとすると思く感付くのだろうか？

内心毒突きながら、フウルウは少々早口になった。「そもそも、自分の師匠に対する敬愛の念というのは多かれ少なかれ、一般的にあるものだ。そうでなかったら、師と仰ぐべきでない。……君みたいな一部の例外を除いて」

数年前までディーナザードが生徒であった事を今度はフウルウが逆手に持ち出した。ディーナザードも流石に在学中は多少の敬意を表していたものの、現在はかつての師であったフウルウに平然と軽口を叩いている。確かに師弟関係はすでに解消されていし、事実上の居候に敬意を払うのもおかしい話である。だが、それでも普通は過去の習慣に引きずられるものだ。上下関係に謹厳な者からみれば、許し難い豹変だろう。いや、彼女自身も——何故かフウルウが関わると露骨に態度が変わるが——案外礼儀にはうるさい方なのだ。

故に、最後の一言は結構堪えるだろうとフウルウは期待した。しかし……、
「だって、先生、あんまりそういう事を注意しなかったでしょう？」

と、やり返されるとフウルウはまたしても、敗北を受け入れざるをえない。厳密には、

注意しなかったのではなく、注意できなかったのだ。注意しようとする、どうしても、自分の昔——目上の人間への敬意というものに酷く反発していた少年時代——を彷彿としてしまう。しかも、反抗の仕方はディーナザードと違って、酷く稚拙なものだった。

「それにしても可愛い娘ね」

「ああ」ディーナザードの一言でフウルウは現に引き戻された。

「おまけに健気だし、それでいて、しっかりしているし……そこが可愛いのかな」

「異論ない」

あの少女は愚直なまでに素直で、傲慢なまでに気高い。多分、そこが鶴の魅力の源泉なのだろう。純粹に容姿のみを取り出してみれば、鶴の評価は凡となるだろう。コロコロ変わる表情によって、結構な美人に見えるディーナザードにも劣るかもしれない。しかし、鶴には魂を揺さぶるものがあるのだ。ひたむきさや知性、淑やかさや礼節が輝きとなつて、あの少女を彩っている。ディーナザードの人を見る目に、フウルウはつくづく感心させられる。

「ほんと……食べちゃいたいくらい」

「……食べるなよ」

感心が台無しになった。

「子供に手を出したりはしないわよ」

子供でなければ手を出すのだろうか？

何となく、ばつの悪い気分になってフウルウは麵麩ホフスに噛り付いた。